氏　　名	木下　誠
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博　乙　第　　２８９９　　号
学位授与年月日	平成　３１年　１月　３１日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	モダンムーヴメントのＤ・Ｈ・ロレンス ―デザインの 20 世紀における越境・帰郷と共有するアート―
主　　査	筑波大学　教　授　　博士（文学）　佐野　隆弥
副　　査	筑波大学　准教授　　博士（文学）　齋藤　　一
副　　査	筑波大学　教　授　　博士（文学）　中田　元子
副　　査	筑波大学　名誉教授　博士（文学）　荒木　正純

論　文　の　要　旨

本論文は、20 世紀初頭のイギリス・モダニズムの文芸思潮を代表する作家であるＤ・Ｈ・ロレンス(D. H. Lawrence)について、小説のみならず、雑誌『建築評論』に掲載されたロレンスの建築デザインに関するエッセイや未完の断章に注目し、それらを検証することで、20 世紀初頭に文学、美術、建築デザインなど幅広い領域で展開されたモダンムーヴメントに、ロレンスがどのように関与したかを明らかにするものである。本論文の構成は以下の通りである。

序章　「変化をもたらす社会的エイジェンシー」のモダンムーヴメント
第 I 部　〈アート／インダストリー〉としてのモダンムーヴメント
　第 1 章　インダストリアル・アートとしての絵画
　第 2 章　「美の本能」を共有するモダンデザイン
　第 3 章　モダニスト・ベッチマンの〈アート／インダストリー〉
第 II 部　帝国空間の越境・帰郷とモダンムーヴメント
　第 4 章　『セント・モア』とトランスアトランティックな越境
　第 5 章　ハバナに降り注ぐ緑の紙幣
第 III 部　デザインの 20 世紀に向けたモダンムーヴメント
　第 6 章　A・R・オラージュの中世主義モダニズム
　第 7 章　生きることを「教わる」、「みんな揃って」歌う
　第 8 章　ピクチャレスクな都会のイングランド
終章　越境者たちのモダンムーヴメント

序章では、批評家レイモンド・ウィリアムズによる小説家ロレンスの評価を踏まえて、ロレンスが遺した未完原稿「自伝的断章」を中心に取り上げながら、20 世紀イギリスの文学とデザインをめぐるモダンムーヴメント論の学術的意義が明らかにされている。

第 1 章では、ロレンスが工芸家や工芸芸術などのクラフツマンシップに関心を示してきたことを踏まえ、『建築評論』からの依頼で執筆したエッセイ「壁に掛けられた絵」が分析されている。ロレンスが、絵画の私有にこだわる中産階級的「私有財産コンプレックス」を批判し、人々が共有するアートというあり方を提言した文脈の解明がなされている。

第 2 章では、1930 年の夏期にストックホルムで開催された国際モダンデザイン展覧会に合わせて企画された『建築評論』の特集号に掲載された、エッセイ「ノッティンガムと炭鉱のある地方」が分析されている。この特集号は、ヴィクトリア朝的レッセフェール（経済的難局に対して効果的な手段を講じない態度）を批判するという方向性を有していたが、ロレンス自身も故郷の炭鉱の村を歴史的に振り返りながら、イギリス社会の 20 世紀的なデザインを提唱していることが指摘されている。

第 3 章では、後の桂冠詩人で 1930 年代に『建築評論』の編集助手を務めていたジョン・ベッチマンが取り上げられ、彼の代表作「スラウ」や『建築評論』での仕事を分析対象として、ベッチマンが、ヨーロッパ大陸の新しいモダニズムデザインをイギリスの伝統的工芸技術の中で受容するための枠組みを提示しようとしていたことが述べられている。

第 4 章と第 5 章では、イギリスとアメリカという二つの新旧の帝国間の地理的移動と両帝国空間の交渉とを特徴とする中編小説『セント・モア』における、帝国空間の表象が越境と帰郷の観点から分析されている。先ず第 4 章では、イギリスを舞台とした小説前半部が取り上げられ、帝国としてのイギリスにおける優生学の問題が階級の観点から記述されている。第 5 章では、主人公の女性がイギリスを発ってアメリカに向かう小説後半に光を当て、アメリカ帝国主義がはらむパラドックスが分析される。両章を通して、第 I 部で取り上げられたロレンスのテクストにおけるモダンムーヴメントの枠組みが、英米の帝国表象をめぐる本中編小説の中で〈本国＝純粋・純潔（純血）〉／〈植民地＝異種混淆〉としてすでに準備されていたことが明らかにされている。

第 6 章では、ジョン・ラスキンとウィリアム・モリスの思想と実践を 20 世紀前半に受け継いだ中世主義モダニズムに関する議論を起点に、モリスの中世主義の 20 世紀的な展開が、A・R・オラージュ編集の『ニュー・エイジ』におけるギルド社会主義と金融資本主義批判としての社会信用論の主張の中に、またフランク・ピックによる公共交通機関の刷新的なデザインの中に、確認されている。

第 7 章では、ロレンスのもう一つの越境・帰郷小説である『レディ・チャタレーの恋人』が取り上げられ、本作品がイギリスの状況小説というジャンルに属することが先ず確認される。その上で、本小説が 1926 年の炭鉱労働者によるストライキと密接な関連を有しており、その産業問題の解決策として、ロレンスがモリスの思想と実践の継承を提唱していたこと、また生のあらたな感覚という再生の主題の裏で金融資本主義批判を展開していた可能性が存在すること、が指摘されている。

第 8 章では、20 世紀中期の冷戦構造という歴史的背景とリベラリズムの転回という時代環境を踏まえた上で、建築史家・美術史家のニコラウス・ペヴスナーによる著作の検討を通して、イギリス伝統の景観美であるピクチャレスクの美学が、第二次世界大戦後のナショナルかつインターナショナルな都会の景観美をあらたに創造する可能性が論じられている。

終章では、批評家ジェド・エスティによる「人類学的転回」という概念（国外から国内へと向かう視線の変化）と、文学とデザインのモダンムーヴメントという観点とから、議論全体が総括されるとともに、今後の展望が述べられている。

審 査 の 要 旨

1　批評

本論文は、20 世紀前半のイギリス文学を代表する小説家の一人である、D・H・ロレンスに関する研究である。ただし、性や自我や階級に関する論点に偏りがちな先行研究とは異なり、20 世紀前半のヨーロッパを席巻したモダニズムとの関連から、ロレンスの晩年、1920 年代の活動を、小説や詩作品のみならず、ロレンスが投稿し建築専門誌に掲載された評論やデザイン論はもとより、19 世紀後半以降の建築史やデザイン理論をも取り込んで論じているところに大きな特長があり、正にここに本論文の最大の学術的貢献が存在する。

ロレンスは、1920 年代、創作の拠点をイタリアに移した後、さらにセイロン島、オーストラリア、アメリカ大陸へと移動し、再びイタリアへと帰着しているが、その間出身地である、石炭業でかつて栄えたノッティンガムをも訪問している。本論文は、ロレンスのこうした時空間移動を「越境・帰郷」と呼んだ上で、このような経験がロレンスにイギリス社会の現状をいかに認識させ、ロレンスがその社会とどのように関わり合ったかを解き明かそうとする。その際、本論文が提唱し注目するのが、社会をモダンに変化させる運動としてのモダンムーヴメントという概念であり、そのムーヴメントの中で変容する多領域のデザインである。

19 世紀以降のイギリスで進展した産業革命による階級分断と人間性の軽視に対して、ラスキンやモリス等は、中世以来の伝統を有し人々に共有されてきた工芸芸術（アート／インダストリー）の重要性を唱え、その復活を目指した活動を展開してきた。モダンムーヴメントという概念は、従来の正統的モダニズムに加えて、この中世主義モダニズムを内包する鍵概念であり、本論文は、ロレンスがこのモリス等の理念面の継承者であり、「人々に共有される工芸／芸術としてのアート」こそが、1920 年代のロレンスの創造的活動の中核であることを明らかにしており、この学術的意義は大きい。モリスの系譜にロレンスを位置付ける視点そのものは、先行研究がないわけではないが、本論文で展開された規模と深さと精緻さの点で類例はなく、きわめて独創性の高い業績と言える。

以上のように、ロレンスと彼を取り巻く時代環境とを多義的なデザインやアート／インダストリーの観点から分析しようとする試みこそ、ロレンス研究に新機軸をもたらすものであり、本論文は 20 世紀イギリス小説研究はもとより、モダニズム研究にも貢献するものと言うことができる。

一方、本研究に課題がないわけではない。モリスからの系譜を主張する本論文の分析がロレンス後期の活動に偏っており、前半期への言及が見られない点や、各章の分析の主題に多少の不規則さが存在する点は問題点と言えるかも知れない。しかし、これらは本論文の成果を踏まえて今後対応されるべき点であり、優れた研究であるという本論文の評価をいささかも揺るがすものではない。

2　最終試験

平成 30 年 12 月 1 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条（2）に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。